

## 2. 専門医として21世紀をどう生き抜くか

木船小児歯科医院 木船 敏郎

当小児歯科医院は、昭和59年に開業し、今年で12年めになる。

年間の新患来院者数を比較してみると、ここ2～3年新患の来院数が著しく減少している。平成5年の新患はピーク時の昭和61年に較べて約30%減少している。それに対してリコール患者数は毎年ほとんど変化がない。

昭和63年と平成6年の新患者検診時の一人当たりのウ蝕指数を比較してみると、0.3本のわずかな減少がみられた。ウ蝕の進行度でみると、 $C_2$ 、 $C_3$ が減少し $C_1$ が増加している。年齢別に比較すると、1～3歳児ではウ蝕指数の増加がみられ、逆に4～6歳児では顕著な減少がみられた。1、2歳児では $C_1$ が増加しており、3歳児では $C_1$ 、 $C_2$ とも増加している。逆に4～6歳児では $C_2$ 、 $C_3$ が著しく減少している。

昭和63年と平成6年の新患の年齢分布を比較してみると、2歳児の割合が増加し、3、4歳児の割合が減少している。新患の年齢のピークは3歳から2歳に変化し、全体に低年齢化している。

このことは、疼痛、腫脹を主訴とした来院が減少したことを意味し、歯科医師として喜ばしく、しかたのないことだろう。当医院では、当初から予防を中心においできた。特別なことはしてないが、毎回の治療時に必ず予防指導を組み込んでいる。

今回来院患者の保護者におこなったアンケートで『当歯科医院に一番期待することは？』の回答で一番多かったのは、『子供の成長にあった正しい治療』が29%だった。次には、『怖くない治療』が18%、『早く治療を終わらせて』が16%だった。

つまり本音は、怖くない治療や、来院回数が少なく短時間の治療を望んでいる。我々は謙虚にこれに応えねばならないだろう。

小児歯科医療の中心は、『歯科治療による子供の心理負担にどう対処するか』にあると、私は思う。このテーマにそった研究を大学で盛んにおこなって、学会の一つの柱にしてほしいと思う。

## 3. 当医院における歯科医療サービス

いづち小児歯科 井槌 浩雄

総務庁の「日本標準産業分類」によると医療は、ホテル・旅館業等と同様のサービス業に位置付けられている。医療におけるサービスとは、医師だけではなく医療従事者を含めた医療機関が提供するすべての行為を指すといわれている。